

宝ヶ池界隈を巡る，生物多様性（鳥から見てみる）

京都府立大学 福井 亘

1. 人文と自然の環境

宝ヶ池界隈は，都市に近接した空間に位置しています。そこには人文と自然，それぞれの環境が織り成された大都市の「極（きわ）」の部分ともいえます。

まず，人文の環境をみていきましょう。当地区は，歴史的にも長い期間，近郊の農耕地として，洛中へお米や野菜，薪炭などといった生活のための生産拠点でもありました。こういったことから，文化的にも「農」を主体とした「里地里山文化」の環境が色濃く残った地域・地区であるといえるのです。これは，宝ヶ池界隈を見つめ直すと，今でも農耕地が散見され，この地区の特質的な貴重性を，都市化の進んだ現代の京都へ継承してくれています。それは，四季それぞれの伝統行事や食といった文化，町（村）域の区割り，高野川から流れる水路の用水敷設など，農が培った環境が今でも色濃く残り，見ることが出来るのです。

加えて，自然の環境への視点を転じてみましょう。この里地里山文化の空間は，生き物にとっての貴重な生息環境を提供しています。このことは，都市化の進んだ京都市の中でも，非常に貴重な環境を現在も保持しているといわざるを得ません。この宝ヶ池界隈には，西側に「深泥池生物群集（昭和 63（1988）年）」として天然記念物指定を受けている深泥池，そして界隈中心には松ヶ崎城址を中心とした二次的自然環境の里山空間が残っています。その里山周辺域にはモザイク状ではあるものの農耕地と高野川といった都市河川の環境が広がっています。そして，それらを小さいながらも繋ぐ幾つもの水路が生態系のネットワークとして小さな通り道といった役割で活用されているのです。

このような環境に生物が数多くみられるのは必然ではあるのですが，都市に近接してこれほど良い環境を持っている場所は，他都市でそうそうあるものではないといえます。

2. 鳥たちの環境

今回の野外講座の中で，主たるものとして「鳥」を挙げて観察しました。なぜ鳥類を取り扱うのか。それは，都市に生息している生き物の中でも，鳥類を確認していくことで，当地区の生態系の位置づけが，ある程度明らかになっていくからです。鳥類は（全てとは言いませんが），都市の中で「生態系の上位種」に位置することの多いといえる生き物です。いわゆる生態系のおもむき食物ピラミッドの上位種に位置し，都市の生態系の状況を確認することができるのです。生物多様性を学んでいく上で，生態系の中の上位種をみていくことは，都市生態系としての現状が明らかになるのです。

例えば，今回の野外講座で確認できたキツツキ科のアカゲラ（純絶滅危惧種・京都府）は，雑食性であるものの，餌の主たるものはカミキリムシの幼虫など樹の中にいる昆虫類を採餌し，生息をしています。もちろん木の実なども採餌します。アカゲラが生息しているということは，その環境がアカゲラの個体を維持できるだけの昆虫類などが生息でき，木の実なども産出されていることになるのです。つまり，それらの昆虫類が生息できる環

境、木の実が出来る環境ということは、それらの昆虫類自体が、採食できる樹木や草本類、木の実がなる樹木もあるということがいえるのです。これは、生態系が上手く回っているからこそ、高次捕食者である鳥類が確認できるのです。確認できたアカゲラ的一种だけでもその環境が見えてきます。もちろん、生物多様性の観点で見ると、一種のみの確認では、歪な構成になってまいりますので、多角的に見ていく必要があります。

今回確認できた鳥類では、アカゲラと同じ昆虫類を採餌する種として、シジュウカラやヤマガラ、エナガ、コガラ、コゲラ、メジロなどが見られました。こういった鳥類が確認できることは、その場の生態系の豊かさを確認できること、つまり、生物多様性も豊かである可能性がある指標の一つであるといえるのです。

また、これら以外の鳥類の確認については、表に標記しました。野外講座の日が10月中下旬と秋に入っていましたので、本来なら越冬期の鳥類としてのカモ類やシロハラ、ツグミなども確認できるはずでしたが、残念ながら確認することはできませんでした。京都市の気温や環境の状況が年々変わってきているようにも感じます。そういった点も経年で合わせてみて頂ければ、鳥類が環境にもだいぶ左右されていることがみえてきます。

3. 生物多様性

今回の野外講義で見た空間の中でも、「生物多様性」を考えるきっかけはたくさんありました。多くの人にとって、生物多様性は、「生き物」といった点に注視されがちです。しかしながら、その土台となる環境に目を転じていくと、生物多様性が一つの項目のみで形作られていないことが見えてきます。

「鳥」は、考えるための一つのきっかけです。この鳥たちが生きていく環境には、今までこの宝ヶ池界限で時間軸の中で形作られてきた里地里山文化があってこそだといえるのです。環境は変化しつつも、この時間の中での推移が生き物にとって、いわば生物多様性にとって、次の世代へつなげていく貴重な役割を指し示しているといえるのです。

生物多様性について、環境省は次のように説明をしています。その説明とは、「生物多様性とは・・・『生きものたちの豊かな個性とつながりのこと』」。環境省が示している生き物たちの豊かなつながりは、とても大切な点です。そのことについて多くの方は、認識をしています。この野外講座では是非考えて欲しいのは、この生き物たちの豊かなつながりを、「後世まで永続的につなげていくためにはどうすべきか」です。その土台はいったい何だろうか、それを継続するにはどういった環境が必要なのだろうか。そういった視点を持ってもらえると、「生物多様性」が表面的、外面的だけでは無く、内面的なもの大切さも見えてくるものと私は考えています。皆さんはどう思われるでしょうか。

ぜひ、この連続講座から宝ヶ池界限といった、必ずしも小さくともなく、大きくともない地区での環境をゆっくりと見渡して、見直してもらい、この地区での生物多様性の状況を少しでも考えてもらえるきっかけが提供できたら、幸いです。

4. 資料

今回の野外講座で確認された鳥類はあまり多くの種は確認できませんでしたが、それでも6目15科21種、確認できました。その種名リストを表に示します。この秋の時期であるともっと多種多様な鳥種が確認できたと思うのですが、調査した時間等の制約もあり、21種となりました。しかしながら、この宝ヶ池には数多くの鳥類が生息、飛来しています。よく見て頂くと、このリスト以外たくさん確認できると思いますので、機会があれば、ぜひ鳥を見て生物多様性を考えてみて下さい。

表 確認鳥種リスト（観察日：2014年10月26日）

目	科	種名	学名
カモ	カモ	マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i> Linnaeus, 1758
		カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i> Swinhoe, 1866
ハト	ハト	キジバト	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i> (Latham, 1790)
ペリカン	サギ	コサギ	<i>Egretta garzetta garzetta</i> (Linnaeus, 1766)
タカ	タカ	トビ	<i>Milvus migrans lineatus</i> (Gray, 1831)
キツツキ	キツツキ	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki nippon</i> (Kuroda, 1922)
		アカゲラ	<i>Dendrocopos major hondoensis</i> (Kuroda, 1921)
スズメ	モズ	モズ	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i> Temminck & Schlegel, 1845)
	カラス	カケス	<i>Garrulus glandarius japonicas</i> Temminck & Schlegel, 1847
		ハシボソガラス	<i>Corvus corone orientalis</i> Eversmann, 1841
	シジュウカラ	コガラ	<i>Poecile montanus restrictus</i> (Hellmayr, 1900)
		ヤマガラ	<i>Poecile varius varius</i> (Temminck & Schlegel, 1845)
		シジュウカラ	<i>Parus minor minor</i> Temminck & Schlegel, 1848
	ヒヨドリ	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis amaurotis</i> (Temminck, 1830)
	エナガ	エナガ	<i>Aegithalos caudatus trivirgatus</i> (Temminck & Schlegel, 1848)
	メジロ	メジロ	<i>Zosterops japonicas japonicas</i> Temminck & Schlegel, 1845
	スズメ	スズメ	<i>Passer montanus saturates</i> Stejneger, 1885
	ヒタキ	ジョウビタキ	<i>Phoenicurus auroreus auroreus</i> (Pallas, 1776)
	セキレイ	ハクセキレイ	<i>Motacilla alba lugens</i> Gloger, 1829
		セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i> Sharpe, 1885
	ホオジロ	アオジ	<i>Emberiza spodocephala personata</i> Temminck, 1836

※鳥種の順は、日本鳥類目録改訂第7版（日本鳥学会，2012）に準じて記載しています